文学に見る、心に効く風景・景観の処方箋

―人生の主人公になるために―

北海道ニセコ町　山 崎 英 文

第１章　研究の背景

筆者はニセコ町役場に就職して四半世紀が経過したが、近年の傾向として、役場に用事があって来庁したり、電話をかけてきたりした人のなかで、いわゆる「切れる」人が年々増えているように感じている。

「切れる」人については、筆者の職場だけではなく、日々の新聞やテレビのニュースなどでも、児童虐待や通り魔、ストーカー殺人など、短絡的で凶悪な事件をしばしば目にする。世間一般の傾向として、精神的に余裕のない人が増えているのではないか。

そして、世間で増加する精神的に余裕のない人々が、ある面では、「切れる人」や短絡的で凶悪な犯罪者として現れてくるとすれば、別の面では、心の病を患う人や自ら命を絶つ人として現れてくるのではないだろうか。

そう考えて、うつ病などの患者数や、自殺者数の年次推移について調べてみた。

厚生労働省「精神疾患のデータ」によると、図１のとおり、うつ病などの患者数は平成８年から平成２３年の１５年間で２．２倍に増加し、約１００万人が罹患している状況だ。（注１）

また、内閣府「自殺者数の年次推移」によると、図２のとおり、毎年、３万人ちかくの人が自ら命を絶っている。いわば、地方都市が毎年ひとつずつ消滅しているような状況で、年間の交通事故死者数０．４万人にくらべても、かなり大きな数字といわざるを得ない。（注２）（注３）

日本の社会全体が、「安全・安心」とは程遠い、危険で不安な状況になっているのではないか。

それに関連して、国連による「世界幸福度報告書２０１３」の結果がある。この報告書では、ＧＤＰ世界１位のアメリカは１７位、２位の中国は９３位、３位のわが国日本は４３位となっている。ＧＤＰの高さと幸福度の高さは比例しないようだ。（注４）

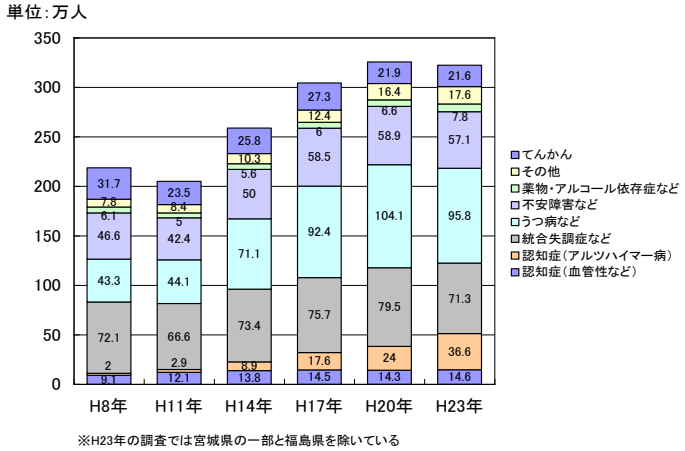

図１：厚生労働省「精神疾患のデータ」

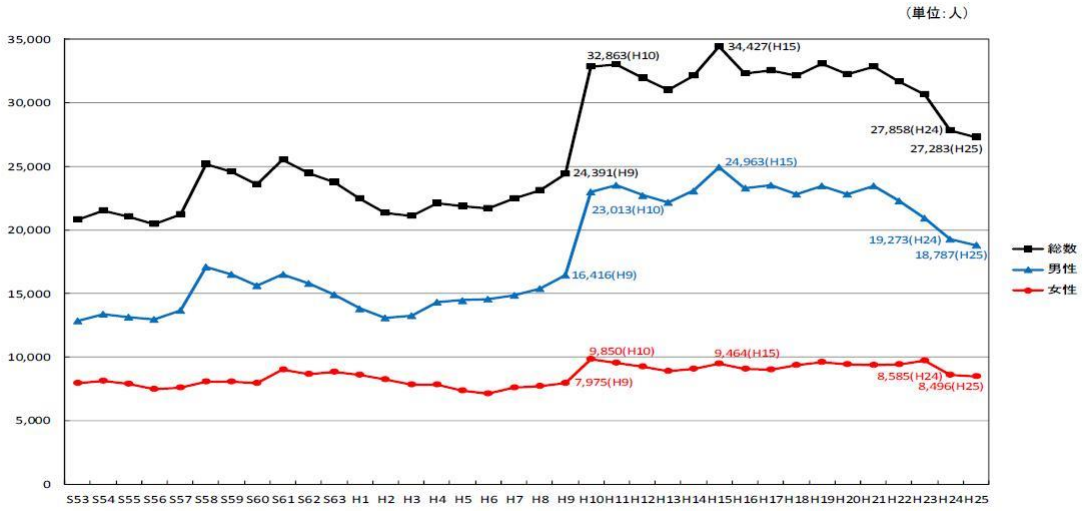

図２：内閣府「自殺者数の年次推移」

この状況を解決するために、何かできることはないだろうか。それを考えた際、筆者が個人的な経験から感じていた、良い風景や景観の心理的な効果が役に立つのではないかと考えた。

筆者が学生時代、アパートに住んでいたときは、窓を開けると隣のアパートの壁が見えるだけで、ニセコ町に就職後に住んだ建物も同様な状況だった。そんな景色と長く付き合っていた結果、できるだけ景色の良い場所に住みたいと思うようになり、広々とした風景の見える現在の場所に転居した。その結果、毎日窓から見える風景にいつも癒されていることを感じている。

この経験から、良い風景や景観は人の心理に良い影響を与えると、個人的には確信している。そこで、「心に効く」良い風景や景観の有り様を、心の「処方箋」として追求することとした。

第 2 章　研究の目的と方法

第 1 節　研究の目的

良い風景、景観とは何かと考えたとき、個人的には、こんな景色が良い景色、というイメージはあるが、誰もが同様に考えるか否かは定かではない。

そこでこの研究では、文学作品に目を向けることとした。

文学作品に表現された、良い風景や景観の有り様と、登場人物の心理への効果を調査し、整理したら、良い風景・景観の有り様を意識化するとともに、その活用を広く提案することができるのではないだろうか。

なぜなら、文学作品には、美しい風景や心の琴線に触れる景観の有り様が、作家の鋭い感性でとらえられ、磨きぬかれた文章で表現された場面を目にすることができる。それらの文章には、個人や特定の地域、時代を超え、読者とともに長い時間のなかで客観化された風景・景観の美と効用が表されているはずと考えたからだ。

文学における良い風景や景観の有り様を整理して、今まではっきりとは言葉にできなかったイメージを、より確かなものにしていく。そして、多くの人が幸福感を感じられるような風景・景観の感じ方や使い方、心の「処方箋」を提案することができるのではないか。

このように筆者は考え、文学作品から風景･景観の心の処方箋を導き出すことを、この研究の目的とした。

第２節　研究の方法

最初に、風景や景観という言葉について、用語の定義をしておきたい。『広辞苑（第３版）』では、風景は、「①けしき。風光。」とされている。景観は、「①風景外観。けしき。ながめ。また、その美しさ。②自然と人間界のこととが入りまじっている現実のさま。」とある。景観の定義のうち①については、風景の定義①と同一と考えられる。そのため、この研究では、景観については、定義②をとりたい。（注５）

研究の方法としては、文学作品から、風景や景観が登場人物の心理に良い影響を与えている場面を検索し、収集することになる。その際、著作権の切れた日本の文学作品のテキストデータを無料で公開しているウェブサイト「青空文庫」を活用する。（注６）

ここで公開されている多くの作品のなかから、特によく読まれている作品を選び出すこととする。これには、読書内容を記録するためのウェブサイト「読書メーター」のランキングを参照する。（注 7）

表１のとおり、ランキングでベスト５０に選ばれた作品のなかで、青空文庫にて公開されている作品のうち、短歌･俳句（石川啄木「一握の砂・悲しき玩具」）を除く３１作品を検索の対象とした。

表１：「読書メーター」ランキング５０
（網掛けは「青空文庫」で閲覧可のもの）
（同一作品のだぶりは一つにまとめ、作家順に並べなおした）

作家名	作品名	ランキング
夏目漱石	こころ	1
夏目漱石	坊ちゃん	5
夏目漱石	我輩は猫である	12
夏目漱石	三四郎	15
夏目漱石	文鳥･夢十夜	16
夏目漱石	それから	19
夏目漱石	倫敦塔･幻影の盾	59
太宰治	人間失格	2
太宰治	斜陽	6
太宰治	津軽	17
太宰治	ヴィヨンの妻	18
太宰治	パンドラの匣	25
太宰治	女生徒	27
太宰治	グッド・バイ	29
太宰治	駈込み訴え	51
太宰治	富嶽百景･走れメロス	56
太宰治	ろまん灯篭	60
三島由紀夫	潮騒	3
三島由紀夫	金閣寺	9
三島由紀夫	音楽	23
三島由紀夫	仮面の告白	24
三島由紀夫	美徳のよろめき	30
三島由紀夫	午後の曳航	43
三島由紀夫	岬にての物語	45
川端康成	伊豆の踊子	7
川端康成	雪国	10
川端康成	古都	11
川端康成	みずうみ	13
川端康成	眠れる美女	37
芥川龍之介	蜘蛛の糸･杜子春	8
芥川龍之介	河童･或阿呆の一生	31
谷崎潤一郎	春琴抄	14
谷崎潤一郎	刺青･秘密	38
谷崎潤一郎	痴人の愛	39
谷崎潤一郎	猫と庄造と二人のおんな	40
谷崎潤一郎	蓼食う虫	41
安部公房	砂の女	21
梶井基次郎	檸檬	22
中勘助	銀の匙	32
宮沢賢治	風の又三郎	33
宮沢賢治	注文の多い料理店	57
村上春樹	海辺のカフカ	34
森鴎外	雁	36
武者小路実篤	友情	44
小林多喜二	蟹工船･党生活者	46
大江健三郎	芽むしり仔撃ち	47
泉鏡花	草迷宮	48
打田百聞	阿房列車	50
遠藤周作	沈黙	53
石川啄木	一握の砂･悲しき玩具	54

この３１作品に加えて、ニセコ町にゆかりのある作家、有島武郎の作品から、「青空文庫」で公開されている、北海道を舞台とした４つの作品、「生まれ出づる悩み」「カインの末裔」「星座」「親子」を加えることとした。

これら３５作品のテキストデータを、風景や景観を示すキーワードにより検索した。キーワードとしては、「見渡」「眺」「光景」「風景」「景色」「景観」「都市」「街」「樹」「並木」「建物」「建築」とした。これらキーワードの含まれるテキストデータのうち、「〇〇の顔を眺めた」など、風景・景観と無関係な文章は除いたうえで、キーワードと同一段落内に、登場人物が何らかの風景や景観の有り様を見て、良い心理的な効果を感じている場面を選び出す。それらの場面の分類･整理を試み、心の「処方箋」へとつなげていくこととした。

なお、研究のフローについては、図３のとおりである。

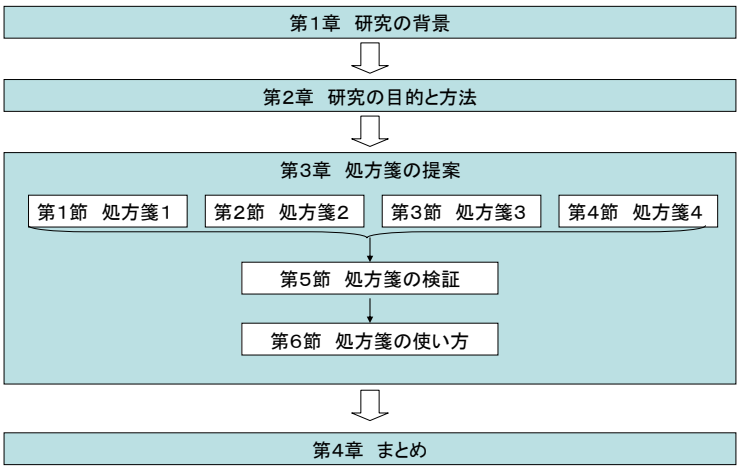

図３：研究のフロー

第３節　先行研究とこの研究の位置付け

文学作品に表れた風景・景観についての先行研究としては、『文学における原風景』（奥野健男著）がある。（注８）

この先行研究では、文学作品を深層意識的に決定する作家の「原風景」について、文学作品から一部を抽出して論考している。そして、戦前の小説には落ち着きと懐かしさを感じるが、現代小説には生理的な違和感を感じていること、その原因が「原風景」の喪失にあることを述べている。更に、現代の原風景を求めて、「原っぱ」「隅っこ」の発見と創造を求めることなどについて、縄文時代と弥生時代という日本人の集合的無意識を対比しつつ、論じている。

先行研究での、文学作品の一部を抽出して論考をすすめる方法を参照しながらも、筆者の研究は、時代による文学表現の違いや、その原因について比較考証するものではない。この研究では、作家が表現した風景・景観が登場人物に良い心理的効果をもたらした場面を抽出し、そこから、ある種の風景･景観の有り様の人間心理への「処方箋」を整理し、その活用を提案しようとするものである。

第３章　処方箋の提案

前章で選択した３５の文学作品のテキストデータについて、Ｗｉｎｄｏｗｓを基本ソフトとするパソコンのプログラム「メモ帳」で開き、「編集」メニューの「検索」で、前章第２節で述べたキーワードについて順次検索した。

そこで検索されたキーワードを含む６１４の段落のなかで、まず、風景・景観の有り様についての記述がない５７５の段落を除いた。

次に、風景・景観の有り様についての記述はあるが、それが登場人物の心理に良い影響を与えている記述がない３３段落を除いた。

この作業により、３５作品中で、風景・景観の有り様についての記述と、それが登場人物の心理に良い影響を与えている記述が、同一段落内にある段落として、表２のとおり、３人の作家の４作品から６つの段落を抽出することができた。

なお、抽出の際の条件として、風景・景観の有り様についての記述と、それが登場人物の心理に良い影響を与えている記述について、どちらも同一段落内にあることとしたのは、風景・景観の有り様と登場人物の心理とが直接関連するためには、相互が文章のなかで同一段落内という極めて近い位置にあることが必要と考えたためである。

表２：抽出された４作品と６段落

作家	作品	段　落	作家	作品	段　落
夏目漱石	こころ	電車の通路になってから、あそこいらの様子がまるで違ってしまいましたが、その頃は左手が砲兵工廠の土塀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立って、何心なく向うの崖を眺めました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずっとあの西側の趣が違っていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。	夏目漱石	三四郎	翌日は正八時に学校へ行った。正門をはいると、とっつきの大通りの左右に植えてある銀杏の並木が目についた。銀杏が向こうの方で尽きるあたりから、だらだら坂に下がって、正門のきわに立った三四郎から見ると、坂の向こうにある理科大学は二階の一部しか出ていない。その屋根のうしろに朝日を受けた上野の森が遠く輝いている。日は正面にある。三四郎はこの奥行のある景色を愉快に感じた。
梶井基次郎	檸檬	何故だかその頃私は見すぼらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまう、と言ったような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかっていたり――勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵があったりカンナが咲いていたりする。	有島武郎	星座	思いなしか、そのずっと先の方に恵庭の奇峰が夜目にもかすかに見やられるようだ。柿江にはその景色は親しましいものだった。彼がひとりで散策をする時、それはどこにでもいて彼を待ち設けている山だった。習慣として彼は家にいるより戸外にいる方が多かった。そして一人でいる方が多かった。そういう時にだけ柿江は朋輩たちの軽い軽侮から自由になって、自分で自分の評価をすることができるのだった。慣れすぎて、今は格別の感激の種にはならなかったけれども、それだけ札幌の自然は彼の心をよく知り抜いてくれていた。
		そう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟雨のように浴びせかける絢爛は、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままにも美しい眺めが照らし出されているのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んでくる往来に立って、また近所にある鎰屋の二階の硝子窓をすかして眺めたこの果物店の眺めほど、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀だった。			いつでも見落すことのできないのは、北二条と大通りとの交叉点にただ一本立つエルムの大樹だった。その夕方も園は大通りに出るとすぐ東の方に眼を転じた。エルムは立っていた。独り、静かに、大きく、寂しく……大密林だった札幌原野の昔を語り伝えようとするもののごとく、黄ばんだ葉に鬱蒼と飾られて……園はこの樹を望みみると、それが経てきた年月の長さを思った。その年月の長さがひとりでにその樹に与えた威厳を思った。人間の歴史などからは受けることのできない底深い悲壮な感じに打たれた。

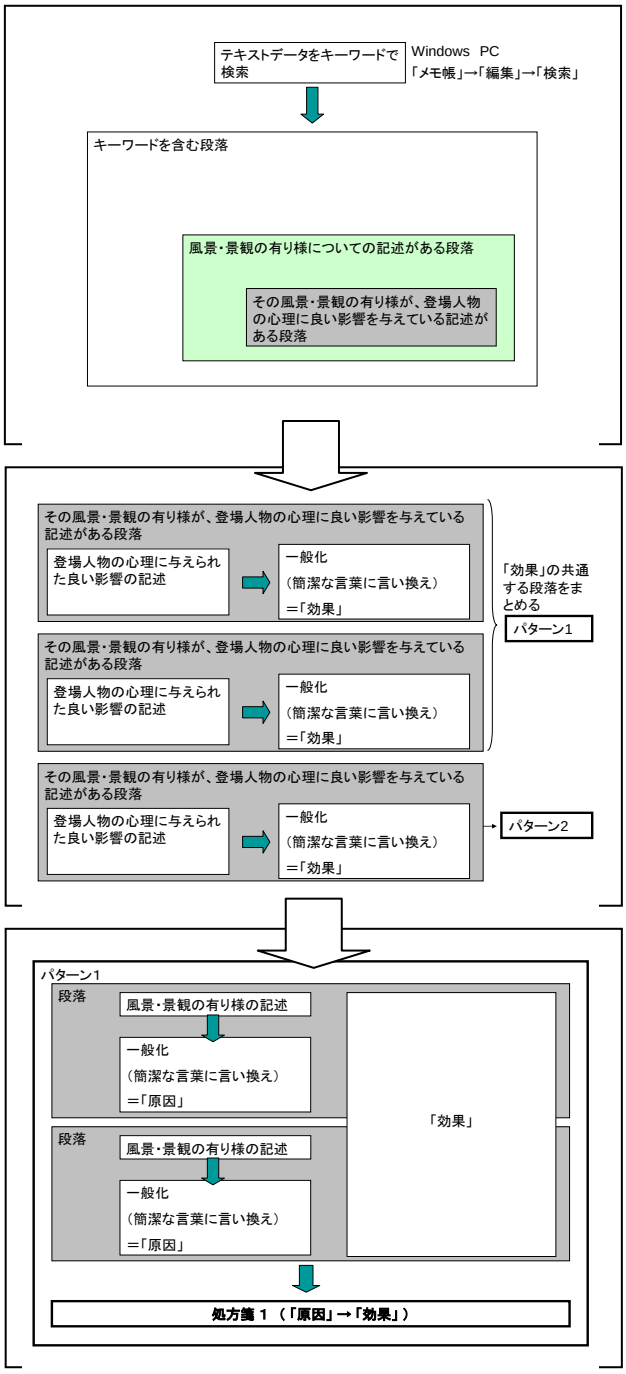

図４：処方箋抽出のフロー

ここで検索された６つの段落から、登場人物の心理に与えられた良い影響の記述について、一般化できるよう簡潔な表現に言い換えた（＝「効果」）。

次に、「効果」が共通している段落をまとめて、４種類のパターンに整理した。

これらの各パターンから、風景・景観の有り様の記述についても、一般化できるよう簡潔な表現に言い換えた（＝「原因」）。

このようにしてまとめた、登場人物の心理への４種類の「効果」と、その「原因」となる風景・景観の有り様について、４つの処方箋として提案する。

以上の処方箋抽出に係るフローについては、図４のとおりである。

第１節　処方箋１―心を休めたい時

文学作品の登場人物に対して、ある種の風景・景観は、「心が休まる」効果があると考えられる。そのような効果がある風景・景観の有り様としては、一面に広がる緑や、遠くに広がる山並みがあげられる。

夏目漱石の『こころ』では以下のような場面がある。（注９）

なお、引用箇所中、太字は検索の際のキーワードで、傍線は風景・景観の有り様、２重傍線は登場人物の心理への良い影響が表現された部分である。

「電車の通路になってから、あそこいらの様子がまるで違ってしまいましたが、その頃は左手が砲兵工廠の土塀で、右は原とも丘ともつかない空地に草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立って、何心なく向うの崖を**眺**めました。今でも悪い**景色**ではありませんが、その頃はまたずっとあの西側の趣が違っていました。**見渡**す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まります。」

また、有島武郎の『星座』では、以下のような場面がある。（注１０）

「思いなしか、そのずっと先の方に恵庭の奇峰が夜目にもかすかに見やられるようだ。柿江にはその**景色**は親しましいものだった。彼がひとりで散策をする時、それはどこにでもいて彼を待ち設けている山だった。習慣として彼は家に

いるより戸外にいる方が多かった。そして一人でいる方が多かった。そういう時にだけ柿江は朋輩たちの軽い軽侮から自由になって、自分で自分の評価をすることができるのだった。慣れすぎて、今は格別の感激の種にはならなかったけれども、それだけ札幌の自然は彼の心をよく知り抜いてくれていた。」

これらの場面から、一面に広がる緑や、遠くに広がる山並みは、心が休まる効果があると考えられる。

第２節　処方箋２―いつもとは違うものの見方・感じ方をしたい時

文学作品の登場人物に対して、ある種の風景・景観は、「いつもとは違うものの見方・感じ方ができる」効果があると考えられる。そのような効果がある風景・景観の有り様としては、年月を経た大樹や建築物などがあげられる。

有島武郎『星座』では、以下のような場面がある。

「いつでも見落すことのできないのは、北二条と大通りとの交叉点にただ一本立つエルムの大**樹**だった。その夕方も園は大通りに出るとすぐ東の方に眼を転じた。エルムは立っていた。独り、静かに、大きく、寂しく……大密林だった札幌原野の昔を語り伝えようとするもののごとく、黄ばんだ葉に鬱蒼と飾られて……園はこの**樹**を望みみると、それが経てきた年月の長さを思った。その年月の長さがひとりでにその**樹**に与えた威厳を思った。人間の歴史などからは受けることのできない底深い悲壮な感じに打たれた。」

この場面から、年月を経た大樹や建築物などは、いつもとは違うものの見方、感じ方ができる効果があると考えられる。

第３節　処方箋 3―まちに親しみを感じたい時

文学作品の登場人物に対して、ある種の風景・景観は、「まちに親しみを感じる」効果があると考えられる。そのような効果がある風景・景観の有り様としては、近景に道路や並木、建物など人工的な市街地があり、遠景に森や山などの自然物が配された、奥行きのある空間があげられる。

夏目漱石『三四郎』では、以下のような場面がある。（注１１）

「翌日は正八時に学校へ行った。正門をはいると、とっつきの大通りの左右に植えてある銀杏の並木が目についた。銀杏が向こうの方で尽きるあたりから、だらだら坂に下がって、正門のきわに立った三四郎から見ると、坂の向こうにある理科大学は二階の一部しか出ていない。その屋根のうしろに朝日を受けた上野の森が遠く輝いている。日は正面にある。三四郎はこの奥行のある**景色**を愉快に感じた。」

この場面から、近景に市街地があり、遠景に自然物が配された、奥行きのある空間は、まちに親しみを感じる効果があると考えられる。

第４節　処方箋 4―日常生活を生き生きと楽しく過ごしたい時

文学作品の登場人物に対して、ある種の風景・景観は、「日常生活を生き生きと楽しく過ごすことができる」効果があると考えられる。そのような効果がある風景・景観の有り様としては、生活感のある下町、横丁などや、夜間の効果的な照明があげられる。

梶井基次郎『檸檬』では、以下のような場面がある。（注１２）

「何故だかその頃私は見すぼらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。**風景**にしても壊れかかっ

た街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまう、と言ったような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかっていたり――勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵があったりカンナが咲いていたりする。」

また、同じ作品中、以下のような場面がある。

「そう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電燈が驟雨のように浴びせかける絢爛は、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままにも美しい**眺**めが照らし出されているのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んでくる往来に立って、また近所にある鉛屋の二階の硝子窓をすかして**眺**めたこの果物店の**眺**めほど、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀だった。」

これらの場面から、生活感のある下町、横丁などや、夜間の効果的な照明は、日常生活を生き生きと楽しく過ごすことができる効果があると考えられる。

第５節　処方箋の検証

文学作品からは以上のような記述が抽出できたが、これらの風景や景観の有り様が、文学作品の登場人物だけではなく、現実にも同様な効果をもたらすことを検証するために、ヒアリングを行うこととした。

ヒアリングの方法としては、まず、処方箋１から４のそれぞれの風景・景観の有り様である、**①一面に広がる緑や、遠くに広がる山並み、②年月を経た大樹や建築物など、③近景に市街地があり、遠景に自然物が配された、奥行きのある空間、④生活感のある下町、横丁などや、夜間の効果的な照明、**にマッチした、ニセコ町内の実際の風景・景観の写真を用意した。図５のとおり、処方箋１と４にはそれぞれ２枚の写真を、処方箋２と３にはそれぞれ１枚の写真を、計６枚の写真を用意した。（注１３）

処方箋１－１

処方箋１－２

処方箋２

処方箋３

処方箋４－１

処方箋４－２

図５：ヒアリング使用写真

それら６枚の写真を、ニセコ町役場の職員１０名（建設課５名・上下水道課３名・税務課２名）に順不同に見せ、写真から受ける第一印象として、処方箋１から４のそれぞれの効果である、**①心が休まる、②いつもとは違うものの見方、感じ方ができる、③まちに親しみを感じる、④日常生活を生き生きと楽しく過ごすことができる、**のうち、最も近く感じられるものを１点選択してもらった。

その結果として、処方箋１の風景・景観の有り様として用意した写真２枚について、１００％と７０％の人が、処方箋１の効果を選択した。同様に、処方箋２の写真１枚については８０％の人が、処方箋３の写真１枚については８０％の人が、処方箋４の写真２枚については８０％と８０％の人が、それぞれの処方箋の効果を選択した。

この高い正答率から、これら４つの処方箋について、それぞれの風景・景観の有り様とその効果との間には、関係があることが伺えた。

第６節　処方箋の使い方

前節までに示された４つの処方箋について、どのような利用方法が考えられるのであろうか。まずは「直接、投与する」ことが考えられる。

それには、住民に、街のなかにある既存の風景・景観で、これらの効果のあるスポットを広く紹介する取り組みなど、例えば、「わが町風景マップ」などでＰＲすることが想定される。それにより、風景・景観を使って心理的効果を得たいひとは、自力でそれらの風景・景観のあるポイントに行って、見て、感じることができるだろう。

また、自力で行かない人、行けない人にとっては、それらのスポットに案内することができるだろう。保健医療・介護・教育などの分野での活用として、自力で行かない人、行けない人を連れて行き、見て、感じてもらうことが想定される。

更に、新たな景観形成に活用することもできるだろう。例えば、公園の新設や改修、街並み修景事業などをする際に、これらの処方箋を活用して、効果的な風景・景観を新しく作り出すことが想定される。

「直接、投与する」ことのほか、「間接的に活用する」ことが考えられる。

それには、景観施策を策定する際の思想的バックボーンとして、これらの処方箋を援用することなど、例えば、計画立案時の資料の作文に応用したり、市民説明会でのコンセプトの説明などに応用したりすることが想定される。

なお、我がまちニセコ町においては、処方箋を「直接、投与する」こととして、観光客向けの新しい地図の作成などによる、「心に効く観光」の提案を考えたい。

ニセコ町は町内にあるスキー場が有名で、国内外から毎年多くの観光客が訪れている。しかし、スキーやスノーボードなど、スポーツを目的に来る人たちの陰には、運動は苦手だが、ゆっくりとくつろぐためだけに、どこかを訪れたいと思っている人たちが数多くいるのではないだろうか。

そんな人たちをターゲットに、心に効く風景・景観として町内の各スポットをアピールできたら、今までとは別の客層を取り込むことが出来るのではないだろうか。

観光資源がスキー場だけでは、全国に複数存在しているウィンタースポーツの盛んな市

町村と競合して、将来負けてしまう恐れがある。スポーツだけではなく、より幅広いメニューでニセコ町をアピールすることができれば、他の観光地と差別化することができ、観光客から、より選ばれるまちになるのではないかと考える。

第４章　まとめ

これまでの論考をふまえ、筆者は、誰もが様々な心理状況やライフステージに応じて、良い風景・景観を活用していけるよう、ニセコ町の風景・景観関連の各事業について、４つの処方箋の活用を提案していきたいと考えている。

誰もが良い風景・景観の効果に気づく、誰もが良い風景・景観を作り上げようと意識する、そのことにより、誰もが風景・景観を使いこなし、良い風景・景観の有り様のなかで、いわば人生の主人公になれる、そんな風景・景観の処方箋が、世界中に広がっていくことにより、結果的に多くの人が幸せを実感できる社会へ近づいていくのではないだろうか。

個人の幸福度を高めることに貢献するものとしては、給料や社会的地位が上がることをはじめとして、様々な物事があるだろう。それらの物事のうちのひとつとして、この処方箋が活用され、わずかでも誰かの幸福度を高めることができたら、個人の集合体である社会全体の幸福度も、少しずつ高まっていくはずだ。

そうして社会全体の幸福度が高まれば、自殺者数や精神疾患の患者数が低下することは間違いないだろう。個人の心に余裕が生じれば、個人を取り巻く社会に寛容性が高まり、そのことが個人の幸福も更に増大させていくという好循環に至ることが想像できるからだ。

そのような好循環に至った社会では、短絡的な犯罪の発生が抑制されることにつながるだろうし、より筆者に身近なこととしては、役場で「切れる」人の減少にもつながることが期待される。

そのような社会の実現を目指して、筆者はもちろんのこと、風景・景観行政にたずさわる関係者ほか、多くの方々によって、風景・景観の心理的効果について、その認知と研究、活用が進められることを願っている。

【引用及び参考文献、ホームページ】

注１　厚生労働省　「精神疾患のデータ」
http://www.mhlw.go.jp/kokoro/speciality/data.html
注２　内閣府　「自殺者数の年次推移」
https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H25/H25_jisatunojoukyou_03.pdf
注３　全日本交通安全協会　「平成 25 年中の交通事故死者数」
http://www.jtsa.or.jp/topics/T-239.html
注４　国連　「世界幸福度報告書 2013」
http://unsdsn.org/wp-content/uploads/2014/02/WorldHappinessReport2013_online.pdf
注５　新村　出　「広辞苑」（第３版）　岩波書店　1983
注６　「青空文庫」
http://www.aozora.gr.jp/
注７　「読書メーター」
http://bookmeter.com/
注８　奥野健男　「文学における原風景」　集英社　1972
注９　夏目漱石　「こころ」（底本：集英社文庫　こころ）　集英社　1991
注１０　有島武郎　「星座」（底本：日本文学全集２５　有島武郎集）　集英社　1968
注１１　夏目漱石　「三四郎」（底本：角川文庫クラシックス　三四郎）　角川書店　1951
注１２　梶井基次郎　「檸檬」（底本：旺文社文庫　檸檬・ある心の風景）　旺文社　1972
（※注９～１２は「青空文庫」で公開されているテキストデータ）
注１３　写真出典（写真４－１を除きニセコ町内の風景・景観）
・写真１－１、１－２、４－２：ニセコ町観光写真データベースより
・写真２、３：筆者撮影
・写真４－１：ウェブサイト「ついっぷるフォト」（http://p.twipple.jp/）より